

神戸西RC飯田美奈子様、神戸東灘RC植田弘様、神田孝平様、大波加会員ゲスト高田義之様、ようこそいらっしゃいました。

先週例会が終わってから、二宮さんと関学野球部を訪問して参りました。木内監督と昔話というか野球談義で盛り上がり、野球教室の打合せが遅くなり二宮さんに申し訳ないことになりましたが、グラウンドを案内して頂いているとき、何十年ぶりに練習用のバット、竹バットを拝見し、感触を味わい懐かしい気持ちになりました。また金属バットの芯の部分にメイプルの木を張り合わせたバットも拝見し、私の時代とは違うときの流れを感じました。私の高校・大学時代は今でもそうだと思いますが、スパイク・バット・アンダーシャツ・ソックスは練習用・試合用と使い分け、バットは練習のときは竹バットを使用し、詰まりますと手がしびれて痛いのですが、耐久性は抜群です。その頃の花形というか憧れのバットが、価格が高いのですが、ホワイトアッシュの木で、メーカーが「ルイスビル」。高級品でありながら、耐久性がなく折れたり欠けたりしていましたが、反発力が強く、真に当たると打球が早く、飛距離も出ていたような記憶があります。佐々木さんとバットの話をしていただいた時、慶応で野球をされていた頃「ルイスビル」を使っていたと聴き、さすがというか私の高校で使っていたのは2〜3人しかいなかったと思います。私は親に言う事が出来ず、竹バットで試合でも打っていました。その竹バットが最後の夏の大会で折れてしまい、野球の神様が怒ったのか、延長戦で敗れました。

試合後、敗れた選手たちが泣きながらグラウンドの砂を集め、袋につめ持ち帰るシーンは高校野球の定番になっています。その起源は色々ありますが、1937年の第23回大会熊本工業が決勝で敗れ、その時の投手が後に「打撃の神様」と呼ばれることとなった川上哲治でした。その川上が、甲子園の砂をユニフォームのポケットに入れて持ち帰り、熊本工業の野球場に撒いたのが最初とされています。

甲子園の砂で有名なエピソードは、1958年に沖縄の首里高校が甲子園に出場した際、一回戦で負け砂を持ち帰ったことです。当時沖縄県は、まだアメリカの統治下にあり、甲子園に行くのもパスポートが必要とされた時代です。

その甲子園の砂が「植物検疫法」に触れることで船が那覇港に入る前に砂は廃棄させられました。首里高校の一件が報道され、日航のстюワードスが、砂がだめならせめて小石でも、と甲子園の小石を広い集め、きれいに消毒し、ダイヤモンドを形取るように桐箱に詰め、首里高校に届けました。その石は甲子園出場を記念して立てられた「友愛の碑」に埋め込まれています。

首里高校野球部監督は、先輩たちの話は生徒にし、そして語り継いでいるそうです。